落噺生鯖船

全

208
71

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71

ガラス使用

落嘶生鯖船

208
71

国立国会図書館　落嘶生鯖船 208-71

ガラス使用

文政庚辰春発兒

柳亭種彦閲并序
玉虹楼一泉著述

落語生鯖船初編

柳川重信画圖

永壽堂梓

昌平坂學問所

落噺生鯖船序

抑船の徳たるやと引書で怖威をきそとそ博覧せ者官ハ
ゞ上氣で居こまつバ只よれ加減ホまつすべ夫何十反と
よ好廻船ゝ二人も乗ぬ田船まで乗ぬ行く不用るとし仏
ゐ仏もいまゝ子でも如渡得船たまゝ其船よせて名べわ
呼ぶたまバ船さへあまバ清姫も地と心ゝあるべきまを船を
浮て大象の重を量船を漕ホ新造せ眠を知る乗船の
賣声ゆ去年せ編急て我忘れ梅見ホ寒ー障子船
ちまこも青簾も納涼の戸ホたてかゝまバ十ちゝ秋ゝせ乃

たちまちに精霊さまのおむかひく蔭をすて稜ば門松を示ふ
でるせそ〜さそ〜と波ゆく駒ふにそ〜と船きみふる舟よ水よ
綾どり衆〜小女もきふハ額ゆる浪戔船綿ふ隠す老婆
となる月日は祢ずそ乃二人船頭嗚呼ち屋れ〜ちめく
實光陰の矢橋船いそげどまそそぬ世帯の辛苦浮世乃
塵乃苡船はゆのまる土ふる身と悟た負で居るとて汝人
玉虹楼の主人一泉ちとてだなし戔編る小冊を携来
り此標題をはけ〜といふ扨ともふ汝え筆をとりて生鯖
船と名ばるとそ世乃常言ふを鯖乃生ぐ〜とといふ

鯖不ど腐ずす或を共ハなし〜そ後戔生ゝて他國へ行ると
いふも汝ゝて早船を生鯖船と号ゝとある老人ふ竹おき
たをバ此小冊も流行ふいちそ〜く其話のほ〜ゝし或を賞
翫一笑とのゝとを後ど実ハ鯖の生腐臭乃はきゝを交るゝ

文政三年庚辰春正月

柳亭種彦戯述

二三六二四八
二五十二六年三
二七十四二八十六

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71
ガラス使用

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71

ガラス使用

目次

雨乞　一
無首尾　二
煙草筥　三
牡丹餅　四
三尊佛　五
正直者　六
才蕨氣者　七
浪人　八
輿早　九
鶴亀　十

通計十條

落噺生鯖船

東都　柳亭種彦閲
玉虹楼一泉編

○あくび　八合

さてこそ、さる田舎のことでござりまして、ある夏、日でりがつゞきまして、ところのかたがたあくびをさせぶたるのことでして、頭をくびめ、海名ちゐがんのようなかつなぶさまぐるまつぶのようをこらえて。きまるところのふ。ちゐがんぶ私のやうなかつがつまりそのいきをこらえるこゝあんがてきまるやうぶさまぐるあんぶでそうなかつてまりまりこそう。ところへ紙こずりひが金屏風の屏ぶーをかつてまりまりこそう。

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71
ガラス使用

こまくらのめごとそれをやまく聞まして。
こゝろ。まづひらくひろてまつぞ。でくりまして。人もこまをつかまして
「さてまれのいそがしたいそうぐこれ。そこれ。そこれあんじぐ。ちう
紙ぐらぬまてくたまるものいとやまするとぐんもぐらく
のまぐきて「さそうさどうぞるをうぐ。そこあのめのぐ

合

○あとさきあ〜

あとさきあ〜のあそうとまうしまうく。わくもさきもあいさを。
ひろきやまのくたまの〜。いつちう人ぶをきうせぬ者ぐ。
まう〜。あるとき大ぜいあつまろて。たまの〜てをやまそうく。与
たうがまあるまます「そりや先ぐまぐきこぐ。ぐ。ぐ。

合

ことをいのぐらうと与ことそく。迎出〜ますト与太郎ぐ
「あまくうんかふげ先くくふかまぐきこけつ〜くうそ
ちやア親くあのまぜの親者小大ぐんうまうとうあつこぐきこれこちやア
まぐ。やめくトやますうう「まいつくふぐうあんうのトぐこち
かつまま〜てそりやアあつのとうこト。笑ぐ歩ると与ちうぐちこア
身ぐ「うくとうふ八ッぐうでもあつこうおまう親者親先くのて
けくうくとうふと二十二三のまうぐ。与ぐ。ぐ氷のまうぐんびう
あをひうまとぬのことおのうぐ。ぐ。むさん人ちげくで。ぐでも
はけうきちやアあうあくと。あすこの松の木のうげくゆげうんぐう
あの松くうぐんくさうも。ぐう親くぐくやくくかく

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71

ガラス使用

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71

ガラス使用

あらくさの行でも大仏さまの相不とも。あらう相ぐあのくらねど
うら大仏さまのお堂まえ大きいよちげく祈へがをうれてふやけく
ちまつこあのお堂の孫ぐ狩屋ふちあ乗ちだる
ぐが流行だろけぐ乳ふ乳いの風形と。いつくそま下のちりくく
乳いあつよ。あまぐがあろぐ祈へまつたぐ女蕊者いい年ぐのねでちけ
まびまちねへむろ一かつのたえふも敷帳ハりえぎ二布ハ全まね
と沢庵和尚ぐ一枚紀諸よかまて通り女ハ髪のめでたうん
てそしあまぐそれぐあんぐ立ちまぐうまあぐこの。市義まげだのよろ
ちあふいつこ浦田まであるぐ。あく拍ぐひつくちあといふも蘭学のの
なまの色いまるゆあちも赤まま祈へ。ちあ今まで天がまるくとありつく

ねこう地のまるのぐさうぐ。あまぐ。チョンくとまるうう芸居も仕
こくあつこのさ三笑ぎでくふやああくりの雨ハ乃多をひのてあこと
あぐ。まあ一乃ぐといのふむのがまい乳山ぐせ。よ一うそま戎
川と金波楼二巻ふあるそまこうと。まの藩千住竹の塚。幸ゑ栗
ま一日光街乃とひつきあまくあやぐりまずうう。そだの人が
「ちまくそあまあいがさうきのけんくまふいどうあつこへなふ
けんくまう。けんくまふなまあつぐと乃ふまくくひうくあふぐう
ふぐけくりつくあまつこ 合

合

○たぐまふたこと

横川のまうくあ右三湯があそびふまあつくまるだんふ横川ぐだだ 合

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71

ガラス使用

おびをくるりまくるりと「おまちどをやこまくたびさも残いまと
きやゝかぶろをこんどくたびと箱をかぐらうのきせるで吸きせ
ますゝ「アイとゆうてたちまゝこぶさァまそどくせどかゝまおれ
ふゝ時すぎくもとねくゝ糸をまゝくゝ「はいの子ァどゝくゝこと
いのごきやくくもねくゝまゝし弁とかぶろハ振袖のさげをいぢや
かぶろ「そまでもむろのぐかゝと舌ふさるといそろやろうゝ
掛屋町のあびあまでまるやまいもこめの残ゝ弁ゝさすがの
おいらんもあきまくゝ「おまきたゝえさんごろうゝくまどゝ分の
きやくぞんの先ぐそんおとをいゝのぢやァ孫ゝよつきのあるのたゞ
ゝ箱ゝあるつのまそねくるのごとゝゝ「ひろやまゝふそめたんを

ちまひまゝくゝかどもぎそ。あるだんゝゝたゞこゝなくゝまゝこと
ゝゝ「おまちどやこまくゝどもをだゝくきやゝのひ吸けます。ゝと
あんごもやちやゝくゝてかのかぶろがすこし注ちゝあつく屁
風のそこゝゝ「モシおいらんへどゝいくゝいせゝ。ゝをゝこさゝうぐく
たゞこゝ箱が疎てちまのいくゝこと

○ぐこのち

あゝゝゝ
初鰹新をいゝてゝあんでもちまこめとぐあるゝゝあまをきけく
とまゝゝを人ぶゝり弁。ある者ぐ糸やまゝゝて「ちと先まゝよちさび孫
ゝたんゝとぐゝり弁あのぐこゝもちゝ牡丹餅と出まゝくゝ秋ぶゝ
このゝ其の長餅とゝゝぐこゝのゝとまゝしまゝぐこそまでゝまこと受拾こ

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71
ガラス使用

ときのいひあらうぶくりまゐぬト仰まするとかの先まゞ「ちろ不ど恋か
おたゞのけでムん牡丹候ゝく出といふハ附會の説でとるふたゞまゐぬ
又ゞと候とのあも訛アそでムルあまゝべと候とのゞきめぢゃ。そもゝ
本辞かどいまゝくつきまゝるとべゝゞくゝ音ゞいくゝを仰ゑその
音を名ふゝんでべゝと候。ちんと仰ゆえまゝ。ちゝゝど西洋ゞ雷ろ
ゝをどんどろといひ吾朝で干大根を刻ゞゝをゝくゝとゝゝと同じ
たゞひでムルトをゝ〳〵まゝすゝとちゝ不ゞいゝくゝかゝゞまゝゝゞゝ落うの
ゝゝらまゝゝゝ人の不ゝゝ先まゝ更ゞと候ゞ一ゝまゝゝゝまゝを
その紙ふ「今日独このゝゝぎまゝゝしつけんゞゝゝと候と出ゝく
今井ゝゝ先生いちゝんゞゝてんゞまゝゝゝまゝ申ゝゝゝその人ふ

先まゝあひまゝゝゝときたゞ孫まゝすゝゝ「さきだゝくゞと候のゝゝを
おゝゞ孫ゆゝべゝと候の本説をおゝゝゝゝゝゝゝゞ附ゝ通ゝゝゞゝと候と
月ゝゝまゝゝゝあまゝゝゝゝゝゝゝゝゞムルト仰ゝまゝすゝゝとかの人ゞまゝゞめ
ふ根ゝ「さまゞゞゞムルゝゝゝゝゝ方ハ出来あひゞんてその外
神ゞゞゝゝゝ今井

○三尊佛

あふ俄乃仏とのゝと大さゝで今井がいゝゝゝる。でゝ坊主ゞゝ
まゝゝゝ祈ひゝきふあゝゝまゝすゝるも発ゝんゞゝゞだとゝて来迎のゝ
尊佛ゝゝゝゝゝゝゝゝ

名ハ何とか升とかの孫まごすると加のでも坊主が芸妓揚く「さ仕ぶ
中ぐらいとう俳ぶごといのまするとう女郎ハ。綱金時仏でゑまさう

○正直者

田舎者といふ者ハ。ある田舎者ぐ。ある田舎者ぐ江戸へはじめて出
まして。稲荷へんのちぐきる者の西へ海てをうて。江戸へんぶつふ
あるきまして。日ぐ暮て日本橋をとをまます。と。ハ。あるあぐ
ゑ升。そそちんぐうとあげくんまると。金紙布てゑ升
さて蕎麦ハくくうとあるぐ。枕りくあるぐ。ちをぐ
五十文ゑ升。のまハよいとをとうとぐ。ぐんぐあぐう。ぐまして
つひそをとうふ蕎くくうまのいます。とをくくうの肉の女房ぐ仏う用ぐ

あるくくかの蕎てをる枕りくくまつくくんまする。そをくくちうぐ小判
たうけぐゑりまするくう。そうとぬきんぐそをくくぬくうぐ落り升と
吹る紙の田舎者ぐ。おきまして。ゆく。升とをくくひのうぐあると
まくくくて。仲秋酒と仲彼をかうてゆうちひまして。おきうと小升
だうををぐんぐをうまするくう「のくくあまくくハぐ仏のくくひぐゑり
升とうの女房ぐくぐ升と「さをぐ伊て下さまるもゆぐ日
本橋ぐ今戎ひ祭つく。枕りくくまくくぐくいくとくくひはてくく
くくさんまぐをくくまくくもぐうまくまをぬ。をくくくくくまぐ夢でおぐくう
仏事ぐうまくくたくあつくく。是くう結合の出る女ふ氏弁れを我くく

○才覚者

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71

ガラス使用

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71

ガラス使用

ある道具屋に伊五郎と申す小僧が今まで忠実に奉公致すゆえ、「その方に小僧てめえの
めぐり合わせだんながよびはげまして、ゆくゆくは天川屋のこう松さんが
ようにいろいろと我いのままを極めまねぐも、天川屋のこう松さんが
ようにまじめのいそしみのときに考えをのこしてやわらべとまねぐも
仕方ねえ。きっとだんなはのっぱらるまいすと考えさせ、だ
この世を渡りかまりくというそれくと。ある日、まいこ屋のお安さんのところに
を売りくやまび魅ときに来て伊五郎。小僧を一わる教に上手に
伊といのところ。ひまどり指ぐ右踊るといの小伝ぐんの三の奥に小踊
ぐみそへ来たかるうち。踊る小張く指ぐ踊ぐ指ぐ

きぐさーでさあうちうつひでは亀のこそを鮫はなりさまの
踊るぐあんでおまます。利口さうはぬ子す。踊ぐ
たまねち義いってだくものとのひは体を奥に積をろって
ろ。前をだくきとのぐそれぐも前と出くすまと
へうず踊たくいやのうおまきろ出ぐ。まづへんぐをせぬぐ
いちぐんまい。だまりてあくまのをちょのとさげるだろまだ
ちまぐ同ぐうでんろさろそを用ぐたまを稼へあんぐろうぬぐはを
へくく。と大きるところぐへんぐをまるのぐそとさんぐは此まを
の小僧ぐつぐの夏くでまーく「へ立同ぐくで見ろ用ぐうね
大きるひぐはんぐうでんろへんぐをまるでも出っぷり用いたまを

○らうゆん

ある米屋ぐきんぞくの浪人者へうどん米をおくりまゝ
をちゝも言のことで。わぐどうぞあのうけがとれてべよいとあんど
とりまゝそ。ぞうどうく大変因ふかのまゝ外とかの浪人ぐ云りくと米
屋へ来ま初代もいゝそずあろちぐをぬぎまゝてきぐゝを
たゝく浪きたて来うといゝまゝそうゝ「まろく御ぢゝされまゝ
どういのうけぐ今外とあゝてさうのぐゝとあますとかのらうゆん
たらくとあまぐをあぐ〳〵今まで嘉つめ命を浪うぎゝれいで
ずとゝまゝ一年後の大事とあつく拂たん金ゝ方〳〵やけの
仏切腹とあずと報〳〵くやされとゝひきろく見えまゝたら

「いやわゝさういふ云ゝあゝ金ゝのいつでもようゝ外トいろく
ゝけをやまゝたゝ浪人も来ゝくあつゝくいゝ。招景を朝〳〵
まゝゝゆゝの米屋もあんどゝく「わぐどうぐらうゆんなゝ見てくも
さすぐかゝ米屋ぐけぐけ又たまゝねがちぐゝのめぐゝ。仏の
うちよかんぞうんいゝ。まァその西ふかゝ。よくおぐゝめゝぞゝ浪
でもあぐゝくぐゝまゝセトヤ外とかの浪人ぐ「いくゝ米ゝいゝ
くゝゝ居外まいまぐゝたゝくゝ〳〵腹を切仏見ゝ拂べまりませぬ

○かおうき

まぐいろゝうゝあゝいでかどゝきぐ花あ橋のたゝゝのたりゝ人でま
して「ゝのかゝくゝといろくをゝゝ外と通りの人が「二百大破をいゝてぐ

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71

ガラス使用

やる「ハイ畏まり」おのゝひまをしてさう今升「二百五十でせうか」
「いやくさうぢやをかけねばやまぬ」けんどんふや升をうずをとる
人のいろくまちまちする又あゝ客がかをまつてもあんなご
きふいのくいつてさうく「ぜひ」ぜひあぶとてかをも升をかうまの
あのご見まつく「こと」おらこちがちやつ升だゝとしいふの家ぢやさうそうを
いろくのちやつまちをよくゆあそねくとふ大儀へいく人まんどがうこと
をきやあぶつそのぶつこまぢやすくてもものせて頂くところなんとう
谷をぬけまやあそこのぶ谷のかまつぐぢ。ぜひたんを方がいろを
ぬけくりとるあぶときのぶぐぶくをつく升と二人をぶぐかんしん
いつてかをまつてさてあくろだんかをるぶとろくでまつてをり

まをすと客人ぶをまつて「こと」大儀をいくらぶぐ「ハイ畏まり」
おぶをあぶぐ今升ぶそれいぶぐでもよう今升「いやくきあぬよ
ゴるんそんあう百ぶやるう「ハイころこゝこぶをます」
トヤ升ゝうかの客人ゝ「おいト」のあふかりまつぶいやくトヤシ
まつくかぶゝうをふゝあ升ゝう「あくりつく百ぶたくをを八十ぶ
ゆをまをせう「いやくそれぶかゝをのぶをぬ「そりやあだんかなぜで
今升「あんまをすんゝうふかぶぬすをあをあらう」

○鶉亀

ぶをまれまつて小ちなる亀と。鶉の亀よゝをかへまつて毎日夫を
ちぶあて乗んぶ居者ぶ今升ゝう。ある者ぶ戎をまつ「おいう

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71

ガラス使用

208
208
71

おめへ鶴亀のふどをかつく歩かれまをかぶるなんてト中の鶴ト彼者ら鶴ハ千年亀ハ万年生るといひます

落噺生鯖船尾

東都　玉虹楼一泉　伯

柳川重信　画

落噺生鯖船　二編　近刻

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71
ガラス使用

208
71

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71

ガラス使用

国立国会図書館　落噺生鯖船 208-71

ガラス使用